

## 卷頭言

新型コロナウイルス感染症  
顛末記

会長 山崎 學



この原稿を書いている時点で、新型コロナウイルス感染者数は増加傾向にあると報道されている。2019年12月中国湖北省武漢市で原因不明の肺炎患者が発生したが、当初この情報は中国政府が情報の隠ぺいを指示したと言われており、闇に葬られた。しかし、肺炎患者が急速に増加し、中国政府としても国際世論に押された形で正式に新型肺炎の存在を認めて対策に乗り出した。日本政府は駐在邦人の救出策としてチャーター機を4機派遣し、さらに1機を追加した。帰国者はウイルスの潜伏期間中、国が決めた収容先に隔離されることになった。

2月1日、夕刻に厚生労働省医政局地域医療計画課から日精協 DPAT 事務局に派遣要請があり、2月2日、千葉県柏市税関研修所と勝浦市勝浦ホテル三日月に群馬 DPAT・千葉 DPAT、埼玉県和光市国立保健医療科学院に埼玉 DPAT が入り、対応した。2月3日、埼玉県和光市税務大学校和光校舎に静岡 DPAT が入った。

こうして対応していた最中の2月5日、ダイヤモンド・プリンセス号（以下、DP号）（船主はアメリカ、船籍は英国）が横浜の大黒ふ頭に着岸した。同船は2,666人の乗客と1,045人の乗員の計3,711人が乗船しており、乗客のうち1,281人は日本人、その他の乗客は数十カ国に分かれており、乗員のうち約800人はフィリピン人、インド人で占められていた。DP号へのDPAT派遣の要請を受けた時点でスタッフの保障について確認したところ、今回は従来の都道府県を介した派遣要請ではなく政府直接の派遣要請だったために、財政的に細部が詰められておらず無保障状態であった。早速政府の対策本部に掛け合い、事後保障の了解をとった。DP号におけるDPAT活動については、二次感染の恐れがあるので船室ではなく甲板等オープンスペースでの診察を強く申し入れたが、実際は船内の診察スペース、患者によっては船室で診察が行われたと聞いている。

2月15日、武漢からの帰国者のうちで陰性が確認された者については自宅待機になった。2月13日、勝浦ホテル三日月、2月15日、税関研修所、国立保健医療科学院のDPAT活動を終了。税務大学校和光校舎も一部活動を終了したが、規模を縮小し継続している。DP号では隔離空間における感染者が増加したが、2月19日～21日にかけて969名の陰性者が下船した。船内の感染防御態勢について問題視するSNS投稿をきっかけに感染症専門家の間でも問題提起され、感染症専門家の派遣が難しい状態となった。これにより、隊員の安全確保ができなくなったため、

2月22日にDP号のDPAT活動を終了した。

問題は、日本全国で散発的に発生している接触既往のない感染者への対応である。散発的な発生で抑えられるのか、パンデミックになるのか、予断を許さない状態にある。

4,000万人の観光インバウンド効果を目標に進めてきた政策に水をさす結果になった今回の事態は、われわれにいろいろな教訓を与えてくれた。行政含めて、目先の利益に目を奪われてリスク管理を怠ってしまっていたことは、大きな反省点である。過去の中国発の重症呼吸器感染症、新型インフルエンザ等を思えば、1,000万人の中国人観光客がもつリスクについて危機管理を考えておくべきであった。また、重症感染症患者が発生したときの対応病床、検査体制不足が露呈した。今日現在も船内に残る外国人乗員の検査が行われていると思うが、感染防御意識が乏しいと思われる船内で、さらなる犠牲者が出ることが予想される。

2月26日、原稿を書き上げたところにDPAT派遣者から陽性反応が出たという報告がきた。離団後の自宅待機期間での発見だったため勤務先への二次感染は避けられる模様であるが、感染防御が不完全になっていた船内で起こるべくして起きた事態と判断している。今後、さらなる陽性者が出ないことを祈るばかりである。

最後に、危険な現場でご協力いただいた秋田、福島、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、新潟、長野、静岡、愛知、三重、大阪、兵庫、岡山、愛媛、福岡、沖縄DPATチーム、派遣調整を行ってくれたDPAT事務局に感謝申し上げる（2月26日現在、189チーム）。